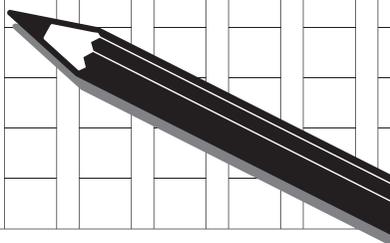


平成29年度

第3回 藤原正彦

エッセイコンクール



入賞作品集



姫路文学館

姫路文学館では、エッセイストとしても人気の高い藤原正彦姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）が「読書」とともに推奨する「書くこと」の大切さを伝えるため、平成二十七年六月に「藤原正彦エッセイコンクール」を創設しました。

本賞は、中学生以上を対象とし、藤原館長の審査により、中学生部門、高校生部門、一般部門の各部門につき最優秀賞、優秀賞、佳作各一編を選考するものです。

第三回目の今回は、全国から一八二七点の力作が寄せられました。

〈へ生きることは創ること〉——藤原正彦館長の言葉です。

何気ない日常、出会った人や書物、あるいは孤独や沈黙も、心のどこかに宿り自分自身をつくり続けているはずです。

このコンクールを通して、多くの方々が、自分を見つめ、考え、文章にする機会を持たれましたら幸いです。

目次

■中学生部門

最優秀賞 「大人」	兵庫県 姫路市立白鷺中学校	二年	芳林 郁利	4
優秀賞 「祖父の家の庭」	岡山県 津山市立北陵中学校	三年	牧本 光瑠	7
佳作 「部屋と家族」	兵庫県 神戸大学附属中等教育学校	一年	山崎 美怜	11

■高校生部門

最優秀賞 「小さな背中」	兵庫県 小林聖心女子学院高等学校	一年	馬場 日和	14
優秀賞 「六年後の成長、そして未来へ」	兵庫県立加古川東高等学校	二年	田中 友梨	18
佳作 「オーバーホール」	兵庫県 姫路市立琴丘高等学校	二年	小國 哲	21

■一般部門

最優秀賞 「イタリアのカラス」	神奈川県 藤沢市（主婦・大学非常勤講師）	松下 真記	24
優秀賞 「ご利益」	長野県 松本市（心理カウンセラー）	松岡智恵子	28
佳作 「星を片づける」	埼玉県 鴻巣市（主婦）	佐々木裕子	32

■概要

第三回 藤原正彦エッセイコンクール 入賞作品集

中学生部門

最優秀賞

兵庫県 姫路市立白鷺中学校 二年

大人

芳林 郁利

今年、両親はそろって四十歳になった。母は「思っていた程四十歳って大人じゃないんだ。」と言って笑っていた。今の僕と同じ中学生ぐらいの時には、二十歳ってかっこいいな、三十歳って大人、四十歳ってめちゃくちゃ落ち着いた大人だと思っていたらしい。実際、自分になってみるとそうでもなかったというわけだ。体力的な面では老いを感じるけどねと笑いながらつけたした母は確かに大人ではあるけれど、僕が思う「大人」とも少し違う。母は、毎日僕のくだらない話を一緒に笑い、時にはゲームもし、家の中はいつも明るく楽しい。僕が思う「大人」とは、経済的にも自立して思慮深く、落ち着いた物腰で周りを見ているというイメージだ。……文字にしてみると、こんな大人な大人は未だ会った事がないなと気付いた。理想と現実という事か。でも、僕が思う「大人」よりも自分達の子供と全力で遊び、笑いあい、思っていたより大人になれない大人になっちゃったと笑って言える両親のような「大人」になりたいと今は思う。何故なら、僕が両親の子供でよかったと思っっているからだ。

ふと、考えると小学生の時は中学生が自分達よりも大人に思ったし、中学生になるのはワクワクしたものだ。実際、中学生になって友達と出かけたりする事も増え親からも先生からも判断を任せられる場面が増えたように思う。しかし、内面は小学生からあまり変わらない。友達とわいわいふざけたり、騒いだり。そう考えると思っていた程、中学生って落ち着いてなかった……中学生になってから、毎日の通学途中で何校かの高校生とすれ違ふし、卒業した先輩が高校の制服を着ているのも見かける事がある。少し眩しく、何故だか少し照れくさくなる。高校生というだけで憧れのような気持ちすら芽生えてくる。小学生の頃も同じ通学路だったのに、特に何も思わなかった事に気が付いた。不思議なものだ。「まず模倣してみる。しかしそれで終わらず吸収消化する。吸収消化して、そのうえで自分の花を咲かせるのが日本人。」という言葉を松下幸之助さんが残している。今の僕は先輩達を模倣し、吸収消化するのに精いっぱいだ。これは高校生、大学生、社会人になっても続いていくだろう。自分の花を咲かせるのがいつになるかはさっぱり見当もつかないけれど、僕の周りには模倣すべき人生の先輩がたくさんいる事だけは確かだ。弟が兄を見て育ち、憧れ、追いつこうと頑張るかのように、人は少し先に目標や憧れを設定し続けて時を重ねていくものなのかもしれない。小学生まではただ日々が過ぎ去っていたように感じるが、中学生になってからは大人になる為の入り口に足を踏み出さざるを得ない環境に

置かれていると実感する。もう子供じゃない、まだ子供だからと矛盾した言葉をかけられる機会が増えたからだ。しかし、子供であって子供ではない心も体も不安定な中学生の間だからこそ、模倣して失敗してもやり直せるし、取り戻せる事も多く、周りの人達からの眼差しも温かいものであるのも事実だ。なりたい大人になるには時間がかかるだろうけれど、今はひたすら模倣からの消化吸収を続けていきたいと思う。そして、いつの日か僕の子供にも僕が父でよかったと言われたい。きっとその時には咲いているはずの僕の花を楽しみにして頑張っていきたい。

中学生部門

優秀賞

岡山県 津山市立北陵中学校 三年

祖父の家の庭

牧本 光瑠

母方の祖父は酒とたばこが好きで、魚釣りが趣味の、いつでも酔っているような人だ。祖父と祖母は一緒に暮らしていたが、祖母は私の曾祖母の介護を始めたため、祖父は二年ほど前から一人暮らしをしている。私がまだ小学生だった頃は、週に一度は祖父の家に泊まりに行っていたものだが、中学に入ってから、休日に部活が入るため、泊まりなど出来なくなった。だから、私が泊まらないまでも顔を見に行くと、祖父はとても嬉しいがる。

昨年十一月下旬、テスト週間に入った土日に、私は祖父の家に泊まりに行った。目的はテスト勉強を進めること。祖父の車で祖父の家に向かっている途中、曾祖父の家に寄ることになった。その家は、私が小学五年生の時に曾祖父が他界して以来、壊されることなく建っている。祖父はたまに庭の掃除に来るが、私はとても久しぶりだった。小学生の頃は、週に一度はここに来て、広い庭を散歩したり、柿の木に登って実を食べたりしたものだと思うし、私は車から降りた。風があつて、とても寒かったから、私はすぐ車に戻り

たくなった。でもせつかく来たのだしと、私は家の周りを歩くことにした。曾祖父の家の庭は植物が多く、きれいな花やぶどう、ゆすらがなる木もある。私は少しわくわくしながら庭を歩いた。

しかし、期待していた気持ちはすぐにすうつと冷めていった。曾祖父が生きていた頃の庭とは別物に感じられたからだ。実がたくさんなっていたはずの柿の木には、小さな柿が数個しか見られず、地面に落ちたようにも見えない。ぶどうの木はすっかり枯れ、花がきれいだっただけの木やゆすらの木は、祖父の手によって根元から切られていた。

「おじいちゃん、ここにあつた木は？ ゆすらは？」

私は思わず祖父に尋ねた。

「ああ、道に出て来て来て邪魔だったし、ゆすらには実があんまりならなくなつたけん、切つてしまった。」

祖父の口調が投げやりに聞こえて、なら別に根元から切つてしまわなくてもいいのに、と言いつうになつたが、祖父ももう年だし、ひんぱんに庭の手入れをするのは難しいのかなと思うと、言えなかつた。

裏庭にも行つてみた。屋根からポタポタと落ちる雨水で出来た苔が美しく、私はその場

所が好きだったが、苔の緑すらもそこには無かった。自然に生えたもののはずなのに……。私は落ち込んだ。裏庭には、以前祖父母と曾祖父が飼っていた犬が三匹埋められている。私はその犬たちに手を合わせて、車に戻った。車から出た時に感じた寒さには少し慣れていたが、初めにあった期待が消え、心はすっかり冷めてしまっていた。まるで、曾祖父が死んだ日から、この家も死んでしまったように思えた。

ある日、私はインターネットで画像を見ていた。水彩画の画像だ。私は絵を描くことは好きだが、色を塗るのは苦手だ。どの画像の絵も写真と間違えるくらいうまくて、私もこんな絵が描けたらなあと思っていた。もし描くとしたら、植物が描きたい。私は自然が好きで、木や花、空を見ていると、心が落ち着く。その時私の頭に、祖父の家が浮かんだ。日本家屋の庭に植えられた、たくさんの植物や堂々と佇む大きな庭石。なぜ忘れていたのだろう。祖父の家の庭はとても美しかったことを。昔は何の気なしに庭石の上って遊んでいたものだが、今ではその石の佇まいを頭に浮かべると、とても素晴らしいものを感じる。そして思い出した。暑かろうと寒かろうと、外に飛び出している頃のことを。これから入試に向けて勉強が忙しくなるが、受験が終わったら、祖父の家に泊まりに行こう。そして、庭の絵を描こう。祖父の家もいつかは住む人がいなくなり、曾祖父の家の

ように廃れて、寂しくなってしまうのだろう。だが、祖父の庭は生き生きとしている。私の好きなことの一つ、絵を描くことにあたっては、祖父の庭は打って付けだ。絵の具を使うのは非常に苦手だが、挑戦するのも大切だ。暑い日は日焼け止めを塗って帽子を被って、寒い日はたくさん着込んで暖かくして、庭に出よう。祖父は絵を描く私を眺めながらお酒を飲み、すぐにいびきをかいて寝てしまうだろうけど、祖父の寝顔を見つつ描くのも、楽しいにちがいない。

中学生部門

佳作

部屋と家族

兵庫県 神戸大学附属中等教育学校 一年

山崎 美伶

私と兄には部屋が無い。家が、狭いがリビングが普通のマンションよりは広いので部屋が二部屋しかない。二部屋の内一つは寝室、もう一つは洋服置き場となっている。だから、一人になりたい時はトイレに行くしかない。部屋が無いと逃げ場がない。勉強してないとすぐにバレるし、怒られても同じ場所にいるしかない。また、部屋が無いと困ることがある。兄と私の試験期間が重なっていないとテレビを見たくても兄が勉強しているため見れなかったり、兄がうるさくて集中しなくてもできなかつたりした。逃げたいならトイレに行けば良いと思うかもしれないが、私の家にトイレは一つしかない。トイレに長時間居られると他の人にとっても迷惑がかかる。兄がトイレに長時間居た時、私が何回声を張り上げたか。私も兄も部屋が欲しいと何回も願っていた。

しかし、部屋が無いからこそその「利点」はあると思う。一番の利点は「家族とコミュニケーションをとらなければいけない点」だ。「とらなければいけない」という言い方だと利点に思えないかもしれないが、私は確実に利点だと思う。もし、私の家に私の部屋があ

った場合。これを想像してみよう。そして、反抗期という設定を加えよう。今の自分に自分の部屋を持っていて、反抗期という設定を加えられた私が、リビングに母がいる家に帰って来た時、次の選択肢のどちらを選ぶだろうか。一、リビングへ行つて「ただいま。」と言う。二、何も言わずに部屋へ行く。小さな声で「ただいま。」ぐらいは言うかもしれないが、確実に二を選ぶだろう。わざわざ今、最も話したくない人であろう母とコミュニケーションをとりにいくことはしない。つまり、部屋があると家族とのコミュニケーションが減ってしまうのだ。そうなると家族の仲が悪化してしまう。コミュニケーションをとらなくなるがために家族であるのに互いのことが分からなくなってしまう。すると、「家族で団欒」なんてのはできなくなるだろう。しかし、部屋が無い場合は、挨拶などの最低限のコミュニケーションは絶対にとるため、家族との関係がそれほど悪化しない。そのため、「家族とコミュニケーションをとらなければいけない点」は利点なのだ。

私の家族は今秋引越す。そして、私達兄妹には念願の部屋ができる。私は嬉しくてたまらないが百パーセントの中の五パーセントぐらいは「部屋ができてしまう。」と思ってる。部屋が無かったからこそ母とたくさん喋ることができたり、兄との仲が深まったりした。自ら進んでコミュニケーションをとったらいいのだが、部屋の誘惑には負けてしまうと思う。「部屋に居れば少し反抗ぎみの父とも喋らなくていいんだよ。」と部屋がささやい

ているように私は思ってしまった。では、引越して部屋ができて部屋が無い時と同じようにコミュニケーションをとるにはどうしたら良いのか。もうこれは「自分が頑張る。」しかない。勉強する時、少しリビングに出てみたり、学校から帰って来た時、リビングに行つてから部屋に行つたり。要するに「部屋の誘惑に負けない私」になつたらいいのだ。そんな私になれば今まで通りのコミュニケーションがとれるだろう。

私が何故そこまで「家族とのコミュニケーション」が大事だと思ふか。それは単純に家族の仲が悪化して欲しくないからだ。そつけない態度をとつてしまうこともあるが、私は家族を本当に大切に思っている。「家族が交通事故で死んでしまう物語」を読むとすぐ目に涙が浮かぶ。部屋ができることで家族の仲が悪化するのが私はどうしても嫌だったのだ。今は部屋ができてコミュニケーションがとりにくくなる程度だが、大人になるに連れ、私達は親から離れていく。それは良いことであるが、悪い方向へ傾くこともある。一人暮らしをしたり、留学したり、結婚したりしても家族とのコミュニケーションを大事にして、これからも仲良く過ごしたい。

高校生部門

最優秀賞

兵庫県 小林聖心女子学院高等学校 一年

小さな背中

馬場 日和

『お願いだから、おばあさん！早くバスに乗って！』

一人のおばあさんが、手すりにつかまりゆっくりと右足をバスのステップにのせた。私は真つ青になりながらその目の前のゆっくりな動きを見つめていた。よい……しよとこれもまたゆっくりと左足をステップにのせる。時は午前七時。まさに通勤通学ラッシュのど真ん中の時間だった。その時間のバスの乗客は皆、大抵急いでいる。私もその一人だった。その日私はすこぶる急いでいた。交通渋滞によるバスの遅延で、いつも乗る電車に乗れない危機がさし迫っていたのである。早く、早く……そう心の中で何度も唱えるうち、ようやく彼女はバスに乗った。その瞬間、私と後ろに並んでいた他の乗客が流れこむようにして次々と乗りこみ、バスは発車した。

そのゆっくりな時の流れは、慌ただしく人が行き交うこの朝の時間には、あまりにも不似合いだった。私が乗車した瞬間、車内の雰囲気がとても悪くなっているのを感じた。しんとした車内で、チツと舌打ちする音や、場違いだよねと笑う声がよく響く。私がつり革

を手にした頃にまだ、彼女はよろよろとほとんど埋まった後部座席の方へ向かっているところだった。それらの声は、彼女には聞こえていないようだった。乗客は皆そろって彼女を見つめる。そのあまりにも冷たく、鋭い視線を一身に受けながらもなお、ゆっくりゆっくり歩く彼女の姿は、とても、とても小さく見えた。

すると、ふとある光景を思い出した。そこには、小さい彼女の背中によく似た、小さい自分の姿があった。

あれは、学校で「高齢者疑似体験」をしたときのことだった。この体験では、視界を狭め、白内障の症状に似せて白いもやをかけたゴーグルと、聴力が低くなるヘッドフォン、関節の動きが制限される特殊なサポーター、ゴム手袋を身につける。そうして実際の高齢者の身体感覚を体験するというものだった。

私には、足を悪くした祖母がいる。会う度に歩くのに苦労している姿がいつも気がかりだった。今回の体験を通して彼女の気持ちを知り、より良い手助けをしたいと思い、参加を楽しみにしていた。そして実際その苦労が、一体どれ程のものが、痛いほど分かった。

「……!?何この感覚……!」

装着が完了し、いざ立ち上がってみると、負担のあまりの大きさに驚き、思わず後ろに転びそうになった。それと同時に、自分の体に自由がない感覚を、初めて知った。立ち上

がることさえ難しかったというのに、これから校舎を歩き回るなど、到底できそうもないと思った。足が、腕が、とにかく重い。関節が曲がらないのもあって、動きが極端に遅くなる。一歩進むだけでかなり疲れる。目も、本当に真正面だけしか見えないので、上下左右に何があるのか、誰がいるのかさっぱり分からない。サポート役の友人の存在は、手探りで確認できたが、その姿はみえないのである。更に、白くかかったもやのせいであらゆる境目が認識できず、それでいて、サポートしてくれる友人の声は、横にいるのにまるで遠いところから話しているようで聞こえにくい。意識しないと自分の声が大きくなってしまふ。終いには手先の感覚が鈍っているため細かい作業ができない。まさに、できないことだらけだった。自由に動かない今の体が嫌で嫌でつらかった。何よりも、自分に自信が持てなかった。自分一人でできないことが多過ぎて、まるで他人の力を借りて自分は生きているようで「申し訳ない」という気持ちと「こんな姿が恥ずかしい」と思う気持ちが入り混じり、泣きそうになった。

ああ、そうだ。今の彼女はあの時の自分だ。精一杯やっているのに、もどかしいくらいに体は思うように動かない。周囲への遠慮と恥ずかしさで心がどんどん、小さくなっている。彼女は今、どんなに心細い思いをしていることだろうか。背中を小さく丸めてうつむく彼女を見る。私は知っている。私の隣には、友人がいた。そして友人は私を助けてくれ

た。一人ぼっちの心細さから。だけど、今の彼女にはいない。誰も、彼女の苦しみを知らない。だけど、私は知っている。考えてみれば、そもそも私がバスに乗るときに手助けをしさえすれば他の乗客が険しい表情をすることも、彼女が心細い思いをすることもなかったのだ。ああ、どうして気がつかなかったのだろう。自分を反省しているうちに、バスが目的地の終点の駅に到着したようだ。人が一気にバスの出口に押し寄せる。彼女も立ち上がった。まだ間に合う。今度こそは。

「お手伝いしましょうか？」手をのばす。

彼女は少し驚いた顔をしてから、優しくほほえみ「ありがとう」と言った。少しの勇気とその一言で世界が変わった瞬間だった。

そしてこれからも、変えていきたい。

高校生部門

優秀賞

兵庫県立加古川東高等学校 二年

六年後の成長、そして未来へ

田中 友梨

自分にとって「たしかなもの」とは一体何なのだろうか。そう自分に問いかけてみる。毎日側にいてくれる家族や友人なのか？それとも刻一刻と過ぎていく「時間」なのか？そう今の自分に考え直させてくれたのは、ある一冊の本のおかげである。

ある夜。皆が寝静まり、平然とした部屋に私一人。なかなか寝つくことができず、ベッドから起き上がり、何気なく辺りを見回した。ふと本棚を眺めていると、ある一冊の本が目が止まった。「これは！懐かしいなあ。この本一番好きだったなあ。」それは、私が小学校時代に最も感銘を受けた「二分間の冒険」という本だった。私はその本を手取るや否や、もう一度読んでみたいという衝動にかられ、その本が持つ不思議な力に引き込まれるように読み進めた。計二三七ページもある、決して短いとは言えない物語だが、昔一番好きだった本だけあって勢いは止まることなく、あつという間に読み終えてしまった。

この物語は主人公の悟という少年が、「ダレカ」と名乗る黒猫との出会いをきっかけに不思議な時間の流れの世界へ飛び込む。黒猫から課された、この世で一番たしかなものは

何かという問いに対する答えを見つけるべく旅の友である「かおり」や他の仲間たちと共に途中で待ち構える、竜との戦いで起こる困難や挫折を乗り越えていくうちにその答えを導き出していくというものだ。この物語での「たしかなもの」とは「悟自身」だった。旅を共にしてきた「かおり」でも、結果倒すことのできた竜でもなかったのだ。私がこの本に初めて出会ったのは、私がまだ小学五年生の時だった。この頃は物語の結末を知っても自分自身がたしかなものであるということに納得できず、ひっかかりを感じていた。自分の身の回りに存在する人や物の方がたしかなものだと思っていたから。当時の私はそんな事を考えていたはずだと約六年が過ぎ去った今、振り返ってみるとそう思う。

六年後、この本を再読し終えると私の中でさらなる疑問が浮かびあがっていた。なぜ当時は自分以外の別の物をたしかなものだと思っていたのか？その答えは意外にあっさりこの本の中に隠されていた。それは、自分が見えていなかったからなのだ。私が思うに、自分をしっかりと見ることのできる人は自分を大切にできる人であり、さらに周囲の人もまた大切にできる人なのだと思うのだ。自分のことも見えていない人が相手の事を大切にできるのだろうか。いや、それは違う。今考えると、どうやら当時の自分には自身を客観的に見つめ直し、広い視野で自分を理解する力が欠けていたようだ。もちろん、今完全にそのような力が身についたというわけではない。しかし、小学五年生から今

に至る高校二年生の六年間で、どれほどの貴重な学びを得ることができただろうか。一瞬で過ぎ去ってしまった六年間だったように思うが、濃密ではかり知れないほど多くの経験ができたことは間違いない。どうだろう。少しは成長することができただろうか。

私の夢は、看護師として自分の手で自分にしか出来ないことをやり遂げることだ。この本から学び得たように自分を大切にし、そして患者さんに親身に寄り添い、信頼を得られるような立派な医療人になりたいと強く思う。

以前、国語の授業で、月日が流れ何年もたってから昔読んだことのある本を再び読んでみると、以前とはまた異なる発見があるというような話を聞いたことがあった。異なる発見が今と昔との成長の証だという。私はこれから先も現状に満足せず、日々少しずつでも成長していきたい。焦らず、一歩ずつ前へと。そしてまたいつの日か、この本を読んで自分の成長を確かめていこうと思っている。私は一度読んだ時から、この本が与えてくれる日常のごくありふれた生活から、突然予想だにしないような非日常的な異世界への冒険が大好きだ。その時に味わった、心の底からこみ上げてくるわくわくした気持ちを今でも忘れてはいない。次にこの本を読む時にも、こうした気持ちを味わえるよう、前向きな心で毎日を過ごしていきたいと思っている。そうすればきっと、成長できると信じているから。

高校生部門

佳作

兵庫県 姫路市立琴丘高等学校 二年

オーバーホール

小國 哲

ガラス面に刻まれた無数の傷の下で、秒針が滑らかに動いている。機械式時計の秒針の動きはやさしい。ゆつくりと針を進めては「慌てなくても大丈夫」と諭してくれているようだ。滑らかな一秒の動きの中にも数ステップする緻密さにいつのまにか目が離せなくなる。

「オーバーホールが完了した。」との電話があった。その瞬間僕の心が躍る。きっとご対面のその時まで、この興奮が続くに違いない。状態によつてはいつになるのか分からないと説明を受けたのは確か一ヶ月前だったと思う。目立つ傷を研磨剤で磨きながら動く姿を思い浮かべていた僕にとつて待ちに待った吉報だった。

この時計が動かなくなって久しい。いつから動かなくなつたかも覚えていないと祖父は言う。そう、今回オーバーホールに出したのは祖父にもらつた腕時計なのだ。壊れた物をくれるのかと思う人もいるだろう。けれどももらつたのは小学五年生の時で、遊びに出掛けた時、帰宅時間にアラームが鳴るようにとクオーツの腕時計を持たされていた僕にとつては「本物の時計」であり、宝物を手に入れたようで嬉しかった。

祖父が言うには、課長昇任の折、これから沢山の人と出合う時に恥ずかしくないものと考え、デパートで購入したものだという。実際、「いい時計ですね。」と声を掛けてもらったこともあったそうだが、時計に興味がない祖父はただ時間がわかればいいとばかりに動かなくなるまで十数年使い続けたのである。

もらってすぐに電池交換すれば動くと思った僕は、時計屋に持って行った。店主は見るなり「これは自動巻ですね。」といって裏ぶたを開け、僕に見るように指をさした。電池はどこにも無い。「どうしても動かしたいなら分解掃除するしかない。」と言って別の時計の裏ぶたをはずし、動いている様子を見せてくれた。

機械式時計のムーブメントを初めて見て、僕はその動きに息を飲んだ。極細の歯車が規則正しく運動を繰り返しては輝きを放ち、点在する宝石がそこに華を添えている。秒針が滑らかに一秒を刻む様子をうっとり眺めていたのだ。果たして祖父の時計はどんなふうになるのだろうか。楽しみで仕方がない。何よりも四十五年前の物が動くようになるということに感動すら覚えた。機械式時計はオーバーホール、つまり部品の分解掃除や注油によって使い続けることができるのである。

一方、クォーツ時計は、バッテリーで、二十四時間三百六十五日休むことなく動き続ける。その秒針の一秒動いては止まり、次の一秒動いては止まるカチカチした動きは機械式

時計とは、全く対照的だ。早くしろ、時間がないぞとせかされているようで、何事にもマイペースな僕はストレスを感じてしまうのである。

僕は今、高校二年生だ。ついこの間高校に入学したかと思ったら、もう来年の進路のことが迫っている。クオーツ時計の秒針のように正確な足どりで休むことなく前へ進むことができているとは言えない毎日だが、やがて全力で走り出さなければならぬ時が来るに違いない。今、オーバーホールが済んだ祖父の時計を手に取り、無数に刻まれた傷を見ながら「もしすべてがイヤになってフリーズしても、また動けるようになる。」と気楽に考えられるようになったが、相変わらず自分の将来のビジョンが見えず、その不安や周囲の期待に苛立ち、反抗的になってしまいうこともある。しかし、そんなとき、知らず知らずのうちに秒針を眺めてアンガーマネージメントをしているのだと気づいたのは最近のことだ。僕のリズムに共鳴しているかのような繊細なその秒針は、ゆっくりながらも着実に時を刻む。そして週末使わないでいると、月曜の朝にはその秒針は動きを止めるのだから、どこまでも僕らしいのだ。

今、こうして何とも心穏やかに過ごしているのも機械式時計のお陰なのである。もし止まってしまっても、オーバーホールして、また動きだせばいいのだから。

一般部門

最優秀賞

神奈川県 藤沢市

イタリアのカラス

松下 真記（主婦・大学非常勤講師）

「それは何の図像ですか。」それが増田さんから聞いた最初の言葉だった。私は美術史の大学院生。自宅近くのコンビニで文献をコピーしている時だった。「絵」でなく「図像」と言ったところに「ただならぬ人」の気配を感じた。振り向けば、小柄で華奢な、腰が大きく曲がった、身なりの良い老紳士が立っていた。ただし眼光の鋭さは凄まじく、その高い批評精神と美意識が一目で見取れた。私は怯みながらも、イタリアのフレスコ壁画に關する論文をコピーしており、これはキリスト教図像の一つであることを手短かに説明した。今にして思えば、それが「ジョットの制作したパドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂壁画装飾の『金門の出会い』」であったことなど、御存知だったに違いない。ともかくも私たちはこのようにして出会い、そして、年の離れた「友人」となった。

増田さんは、近所に住まわれる独居老人だった。正確に言えば、大邸宅の一階には長男一家が住んでおり、独立した造りの二階を占有する形で住まわれていた。増田さんは、もしも私が蹴飛ばせばすぐさま骨折して寝たきりになるのは明らかかなほど細く、またかなり

ご高齢の様子でもあったので、日常生活の不自由などについて少し心配したが、食事は下から運んでもらっているとのことだった。

月に一度、その邸宅二階へお邪魔することになった。私がイタリア語を教え、代わりに増田さんがヴァイオリンを教えて下さるという約束をしたからだ。増田さんは戦後のある高名なヴァイオリニストの優秀な弟子であったが、ヴァイオリニストにはならず、某大企業で会社員生活を長く送った方であった。十数年前に亡くなった奥様とよく海外旅行をされたそうであり、老境でも、ともかく頭脳明晰で知識と教養に溢れていた。

さて、イタリア語を教える段になった。私は留学を見据えてイタリア語を勉強中であったが、そのレベルはまだ人に教えるほどではなかった。一方、増田さんはかつて少し勉強したことがあったようで、単語も文法も一通り御存知だった。増田さんが発音する「フラーゴラ」（苺）は、いつも非常に美しく上品に響き、密かに私のお気に入りだった。

ヴァイオリンを習う段となった。残念ながら、私にこの素養はまるでなかった。音感の悪い私はいつまでも音階すら正しく弾けなかった。時折増田さんは、まるで駄目、というような悲しそうな顔をして、目を閉じた。

高台の二階にあった増田さんのお宅には大きな窓があり、横浜の三溪園や本牧の緑地などが一望できた。夕刻になるとカラスの大群が大きな弧を描きながら遠くへ飛んでゆく。

住宅街の夕刻にはよくある光景であったが、ある時、そんな空を眺めつつソファに座っていた増田さんが、「カラスになりたいなと思う時があるんですよ。あんな風に飛べたらいいですね。」と、小さく微笑んだ。そして、「夕刻というのはね、寂しくなる時間帯なんですよ。」と、独り言のようにぼつりと続けた。普段増田さんは、杖をつき、ゆっくりゆっくり歩いた。少しの段差にも難儀するような生活だった。自他に厳しく理的な増田さんから気弱な言葉を聞いたのは、初めてだった。二十歳そこそこの未熟な学生だった私は、不自由そうな身体でも全く弱音を吐かない知の巨人のような増田さんにも老いと孤独の押し寄せる瞬間があることを、迂闊にも全く想像していなかった。若すぎた私は、何も言えず、厳粛な心持ちで、ただ黙って座っていた。

何度目かの月に一度の約束の日、私は、いつものように増田さんのお宅を訪ねた。何度呼び鈴を鳴らしても、応答がなかった。嫌な予感がした。増田さんのような方が約束を忘れるはずはなかった。意を決して一階へ回る。一階のご家族から、数週間前に増田さんが亡くなったことを聞かされた。風呂場で亡くなっているところを発見されたということだった。葬式も終わっていた。実はその日私は、国費留学生の試験に合格して留学が決まったことをお伝えし、一緒に喜んでもらおうと思っていたのだ。非常にショックで、訳も分からず、泣きながら家に帰った。

一年後、私は北イタリアのパドヴァという小都市で大学に通うようになっていた。増田さんと最初に話した時に見せた、あの壁画がある町だ。朝、バス停でバスを待っていると、小柄なカラスが寄ってきて私を見上げた。しばらく私を見ていた。そして、飛び去った。イタリアには鳩は多いが、カラスはさほどいない。「あ、増田さん。」と、私は気付いた。きつと神様も、気難しい増田さんに手を焼いたのだろう、御要望通り、増田さんをカラスにしてあげたに違いない。私と一緒にイタリアにいらしたんですね。イタリアのカラスになつて自由に空を飛んでいるんですね。そう思った。私はカラスの飛んでいった方向をいつまでも眺めた。そして小さく手を合わせた。

一般部門

優秀賞

長野県 松本市

ご利益

松岡 智恵子（心理カウンセラー）

私は親の葬儀で初めて我が家の宗教を知るほどの罰当たり者だ。しかしある時期、ありとあらゆる神様仏様たちに「ご長寿」を祈ったことがある。しかも他人様ののだ。

あれはかれこれ三十年前の新婚時代だ。転勤族の夫と結婚した私は、山陰地方に転居した。新婚家庭だったせいか、会社が駅から近い住宅街に一戸建てを借りてくれた。人見知り強い私は、知らない土地でやっていけるか不安だったが、隣家のアオキさんが「お母さん」のような方で安心した。

山陰に来て一年が過ぎ、生活にも大分慣れた十月、アオキさんは十二月末に大阪へ引越すことになった。そして今やっている町内会班長の残り任期を頼まれた。我が家も来年四月に転居が決まっていたし、仕事も会報を一月から三カ月配るくらいと聞き引き受けた。

その年も押し迫った十二月の午後、アオキさんが私を呼びにきた。同じ班のカシイさん家のおじいさんが亡くなったので、エプロンを持ってすぐに来てくれとのことだ。私は慌てて、筆筒の奥から皺クチャの白いエプロンを探し出し駆け付けた。

カシイさん宅では亡くなったおじいさんの通夜と通夜振る舞いを自宅で行うらしく、同

じ班の奥さんたちがお手伝いに見えていた。挨拶をし、お線香をあげ、アオキさんの姿を探すと台所にいた。

アオキさんは給食用みたいな大きなお鍋の前で味見をしていた。アオキさんは私を台所に手招きしながら、

「今日の通夜振る舞いのお汁なんだけど、味見してくれる？」

味見すると、とても美味しい。私は、

「とても美味しいです。でもなぜアオキさんが作っているんですか」と聞いた。

「私もびっくりしたわよ。ここでは班長がつくる風習なんですって」

いとも簡単に仰る。それを聞いて私は思わず声を上げそうなくらい、びっくりした。

アオキさんはそんな私に気づくこともなくついだからと、次の三ヶ月は私に班長をお願いしたことを奥さんたちに告げた。

新年早々、私は暗かった。私はあんな大鍋で「お汁」なんか到底できない。日頃カップ三杯くらいの椀物しか作れない私には、想像がつかない大きさだ。どうしよう。十件ほどの班なのだがほとんど地元の方で、カシイさん家のおじいさんと同世代の方々が、そこかしこにいらっしやる。我が家の真裏のクスノキさん家のおばあさんなんか、もつと年上だ。アオキさんがかき混ぜていた大鍋を思い出し、もし「その日」が来たらと思うと気が滅入

ってきた。

そして気が付いた。そうだ、「その日」が来ないようにすればいいのだ。それには祈るしかない。私には確固たる宗教観も信条もないので、前年亡くなった父に手を合わせる時に、和洋問わずありとあらゆる神様仏様たちに、班の皆様方のご長寿を祈ることにした。

そのうち祈るだけでは心もとなく、我が目で班の皆さまの元気を確認することにした。

裏のおばあちゃんは早起きで、いつも朝早くから玄関をお掃除している。これまでグズグズと朝寝坊をしていた私は、おばあちゃんの元気な姿を確認するために、早起きになった。そしてそれまで回覧板はポストに勝手に入れていたのを、お隣の奥さんにきちんと手渡し、ついでに世間話をするようにした。

一月も無事終わり、二月のある日の早朝、救急車が家の前を通り過ぎた。あっちには、班一番のご長寿、スギさんのおじいさんが住んでいる。慌てて家を飛び出すと、雪が積もっていた。スギさん宅の方向に何人か雪かきをしている姿が見えた。情報を仕入れねばならない。これまで雪かきは夫任せだったが、私は猛然と雪かきをはじめた。隣とその隣の前をサカサカと雪かきをしていくと、スギさん宅のお嫁さんがいた。挨拶を交わしさりげなく救急車の話題を出すつと、

「この雪の中、大変よね。どこかしら」

と仰る。ああ、良かった。おじいさんは無事だ。もう目的は果たしたから帰ろうとする
と、雪かきで集まっていた奥さんたちが、

「家の前だけでも大変なのに。ありがとね」

感謝され、心ががめた。

その後、私の付け焼刃のお祈りが通じたのか、私は大鍋でお汁を作ることなく引越しの
日を迎えた。クスノキさんやスギさんたちは、「転勤族でこんなに馴染んでくれた人は、
いなかった」

別れを惜しんでくれた。

私はふと、今だったら皆さんに助けてもらいながら大鍋で「お汁」ができる気がした。
これまで人付き合いが苦手で人間関係がもう一つだった私は、新たな土地でもなんとかや
っていける自信が少しは持てた気がした。

底の浅い信心だったが、どうやら私が一番「ご利益」を受けていたようだ。

一般部門

佳作

埼玉県 鴻巣市

星を片づける

佐々木 裕子（主婦）

息苦しくなったので、窓を開け、夏の夜空に目をやった。夜空のテーブルに星屑がどっさり載っているようだ。

片づけが上手くできなくて打ちのめされている私には、こんな数え切れない無数の星屑を整理整頓しなさい、と言われたら、それこそ寝込むだろう。

けれど、凄いとと思うのは、古の羊飼いは空の星屑の山を星座という形に拵こしらえて、整理整頓してしまったのだ。なんて気の利いた希望のある片づけ方なんだろう。

こんなにも片づけにこだわるのは、私が片づけが下手で、そのセンスというものがま
るでないからである。勿論、羊飼いたちは羊の番をしながら単純に星に名前を付けたり、
星の並びを結んで、想像を膨らませながら鳥や獣の形を描いたのだろう。とにかく楽しさ
が伴っていたに違いない。

「くちばし口に当るあの星がアルビレオ、白鳥座の目印の星なの！」

私の説明は、日頃私に片づけかたを指南する夫でさえ干涉できないほど流暢だ。夫は指

差されるままにアルビレオを探し当て、星の世界に吸い込まれてゆく。

「肉眼ではひとつにしか見えないけど、実は二重星なのよ。黄と青の」

ふたつの星が寄り添っているという、私には忘れられない星になった。それも黄色と青の星だから、きつと目も醒めるような美しさだろうと、心の目を瞠らざるを得ない。

白鳥の翼の左右の星々に根気よく注目し、夜空にひと目で一羽を見渡せるように結んだ時は、見応えがあった。

古の人々は想像力を掻き立てながら、夜空の星畑を耕したんだわ！

見上げる私も、それに負けずに想像力を掻き立てられる。

「あつ、そうぞうりよくっ！」

片づけは創造力なのかもしれない。綺麗な空間を創造する作業なのだ。私は片づけの新しい境地に足を踏み入れた気がした。

短くて小さな秋はあつという間に過ぎそうだった。夫と秋の星見会を催した。熱いコーヒーをすすりながら、夜空を見上げるだけのささやかな会。

水瓶座は十月のこの時期に現れるが、私には巨大過ぎた。小さな星が四つ、Y字型に並んでいる。これが少年が持つ水瓶に当るのだが、両肩や手、足の星から少年の形をイメージするのは至難の業だった。少年が水瓶を持っているのがとても想像しづらく、無理なま

とめ方だと思つたが、把握できなければできないほど古の人々の感性が豊かで洗練されているのだと、恐れ入った。

オリオン座の赤く輝く一等星ペテルギウスと、おおいぬ座のシリウス、そしてこいぬ座の白いプロキオンを結ぶと『冬の大三角形』が現れる。毎冬お馴染みの三角形だが、ペテルギウス以外の周りの星を六つ結んだ『冬のダイヤモンド』は、その大きさと形のいびつさが、家の階段の下の物置にそっくりだった。中に押し込まれている品々が私の頭をよぎっていった。夫はいつもその物置を『階段物置』と呼んでいる。

階段物置の中の掃除機や何足かの予備のスリッパを整理し、用途別に五枚の雑巾をきちんとハンガーにかけて整頓した。片づけの努力が夫の目に留まる日も近いだろう。

私の目にしか見えない掃除機星、スリッパ星、W字型の五つの雑巾星などの隠れた星座が、いびつな『冬のダイヤモンド』の中で健気に煌めいていた。

北斗七星やカシオペア座は方角を知る手懸りになって人の役に立っている。星を整理して、そのうえ活かしているのである。まとまっているから、優雅だったり勇ましかったり可愛いかったり、そんな想像させる力を与えてくれるのだ。収まるべきところにすんなりまとめられた物は、無駄がなく人の目を奪う。

私の背中を押してくれた愛おしいお手本がいつも空にあり、それらを見上げるといこう

とが自分を見守ってくれているのだと知った。

夢幻能のワキよろしく、星に習うとは、時空を超えて交信しているようである。

この齢になると、そろそろ人生の片づけもしなければと身構えるようになる。すると、

「自分が平生不器用だなんて、そんなことにあまりこだわらないほうがいいよっ。」

昼なお気に入りのアルビレオの声がして、私の欠点を庇ってくれた。星は昼でも出てるから、心丈夫だ。私はきつい服を脱いだような解放感にじっくりと浸った。星を、片づけに困ったときの、道しるべにしている自分を現実逃避だとは思わない。誰でも発想は自由なのだから。それどころか、四、五年先？いえ、お迎えの日が来たら、誰かが私を見つけて安らぐような星座の中のひとつの星になりたい、とひそかにほくそ笑んでいる。

平成 29 年度 第 3 回 藤原正彦エッセイコンクール

概 要

■ 審査員

藤原正彦 姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）

プロフィール

昭和 18 年 旧満州生まれ。新田次郎・藤原てい夫妻の次男。
東京大学理学部数学科卒業、同大学院修士課程修了。理学博士（東京大学）。
コロラド大学助教授、お茶の水女子大学理学部教授を歴任。
昭和 53 年『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイスト・クラブ賞、平成 22 年『名著講義』で文藝春秋読者賞を受賞、平成 26 年『孤愁』でロドリゲス通事賞を受賞。
そのほか、『国家の品格』『決定版この国のけじめ』『天才の栄光と挫折』など著書多数。
平成 26 年 4 月、姫路文学館長に就任。

■ 作品規定

対象は中学生以上、テーマは自由、400 字詰め原稿用紙 5 枚以内。
日本語で書かれた自作で、未発表のものに限る。平成 29 年 9 月 13 日締め切り。

■ 賞

「中学生部門」「高校生部門」「一般部門」ごとに〈最優秀賞〉〈優秀賞〉〈佳作〉各 1 編。
賞状、藤原正彦館長のサイン入り著書と副賞の賞金（中学生・高校生は図書カード）を贈呈。

■ 応募状況 … 応募総数 1,827 点

部門別	応募数	兵庫県内			他府県	海外
		姫路市内	姫路市外	県合計		
中学生部門	86 点	55	10	65	21	0
高校生部門	1,086 点	869	209	1,078	8	0
一般部門	655 点	71	98	169	484	2
合計	1,827 点	995	317	1,312	513	2

中学生部門：市外では、西宮市、宝塚市、神戸市、和歌山県、北海道、岡山県、香川県、埼玉県から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめた応募）は 13 校であった。

個人応募は 5 人であった。

高校生部門：県外では愛知県、大阪府、徳島県、宮城県から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめた応募）は 9 校であった。

個人応募は 5 人であった。

一般部門：10 代から 90 代まで各世代から応募があったが、そのうち 60 代以上が過半数を占めた。

他府県からの応募は、北海道から沖縄県まで全国各地に及んだ。

海外からの応募者 2 人は、アメリカ在住者（日本人）である。

■ 表彰式

日時：平成 30 年 1 月 20 日（土）午後 1 時 30 分～3 時

会場：姫路文学館 講堂（北館 3 階）

第3回 藤原正彦エッセイコンクール
入賞作品集

編集・発行 姫路文学館
〒670-0021 兵庫県姫路市山野井町84番地
TEL (079) 293-8228

平成30年(2018年)1月20日発行